

第三十八回 台東薪能

平成二十九年九月五日(火) 午後五時四十五分開演
於・金龍山浅草寺境内(雨天時 浅草公会堂)

演目の解説

〈火入れ式〉

児玉 信 (能楽評論家)
木遣り・まとい 新門齋頭連中

能 番 組

ツレ 鈴木 啓吾
ツレ 永島 充
ツレ 佐久間二郎
シテ 観世 喜正

吉野天人

天人揃

ワキ 森 常好
ワキツレ 則久 英志
ワキツレ 森 常太郎

間 若松 隆

後見 坂 真太郎
奥川 恒治

地謡

中森健之介 遠藤 喜久
菅野 貞男 駒瀬 直也
桑田 貴志 弘田 裕一
小島 英明 中所 宜夫

萩大名

シテ 山本泰太郎

アド 山本 則孝
アド 山本 則孝

〈休憩〉

能

シテ 坂 真太郎

猩々乱

ワキ 館田 善博

大鼓 柿原 弘和
小鼓 鷗澤洋太郎
太鼓 観世 元伯
笛 一噌 隆之

後見 遠藤 喜久
弘田 裕一

地謡

桑田 貴志 鈴木 啓吾
小島 英明 中所 宜夫
佐久間二郎 駒瀬 直也
永島 充 奥川 恒治

演目のあらすじ

能楽評論家 児玉 信

能『吉野天人』 天人揃

春になると彼方此方の桜、殊に嵐山の千本の桜を楽しんでいる都の男たちが、嵐山の花の種を取ったという大和国吉野山を訪れる。折から、峰も尾上も花盛りであった。もつと奥に行こうとしたとき、ふいに里女が現れる。不思議に思いつつも花の友と喜んだ男たちは共に花を眺めた。そのうち夜になる。家路を忘れて花に興じる里女の姿を不審に思った男たちが素性を訊ねると、里女は花に惹かれて舞い降りてきた天女、と名乗って姿を消した。

やがて天女たちが姿を現す。吉野の花の見事さを讃えると、朧月夜のなかに羽袖を翻し優雅に舞を舞い、花の雲に乗って天上していく。夢のようなひとときを描いた美しい能。台東区の木「さくら」に因みます。

狂言『萩大名』

長く在京し退屈した遠国の大名は、気晴らしの遊山を思い立つ。太郎冠者に、下京辺に知り合いの茶屋があるが庭に咲く宮城野の萩が盛りだから、と勧められて出掛ける気になった。ただ、必ず即興の和歌を所望されるので心づもりを、と言われ、嗜みが無いので尻込み。太郎冠者に「七重八重 九重こそ思ひしに 十重咲きいづる 萩の花かな」という歌を入れ智恵してもらい、ようやく腰を上げた。茶屋の庭の色彩感も鮮やかな風情と、無粋な大名のちぐはぐな応対ぶり。その対照が笑いを誘います。

能『猩々乱』

中国・楊子の里に住む高風は親孝行の徳で霊夢を授かる。それは楊子の市で酒を売るならば必ず富貴の身になる、というものであった。告げの通り高風は次第に富貴の身となる。何時のころからか、高風の店に通ってきて酒を飲む童子のような姿の者があつた。杯を重ねても面色が一向に変わらない不思議さに、ある時、高風が名を尋ねる。童子は海中に棲む猩々と名乗り、酒壺を抱いて海中に消えた。

猩々は架空の生物です。人間のような姿で全身赤づくめ、人語を解す、酒を好む、家に来れば繁昌する……など様々な伝説があります。陶然とした風に乱れ舞を見せた猩々が、汲めども尽きぬ酒壺を高風に与えて家の繁栄を約束します。台東区政七十年を祝います。